

「20 世紀の日本の気候」の刊行について

気象庁は、これまで国内の気象観測所で観測された気温や降水量などのデータをもとに、20 世紀における日本の気候変化と今後の気候変化予測についてまとめ、「20 世紀の日本の気候」（A4 版、120 ページ）として出版しました。

本書ではまず、様々なデータを用いて 20 世紀の気候を概観し、私たちの住む日本の気候がどのように変わってきたかをまとめています。次に、20 世紀の日本における顕著な気象災害の歴史を振り返り、最後にこれからの 21 世紀中に予想される地球温暖化に伴う気候変化を解説しています。

具体的な構成は以下の通りです。

第 1 章 20 世紀の日本の気候

- 1.1 最新の平年値を用いて、現在の平均的な日本の気候を季節ごとに説明します。
- 1.2 気温や熱帯夜日数などのデータを用いて、20 世紀中に日本の各地で温暖化が進行していることを示します。
- 1.3 降水量や大雨日数などのデータを用いて、20 世紀の日本における雨や雪の降り方の変化について説明します。
- 1.4 日本を取り巻く海や上空の大気、台風について、20 世紀に観測されたデータをもとに、これらの変化の特徴を解説します。

第 2 章 20 世紀の気象と災害

冷夏、干ばつ、大雪、台風といった 20 世紀中に発生した主な気象災害について、対応する気候データとともに示します。

第 3 章 21 世紀の気候

気候変動に関する政府間パネル（IPCC）や気象庁で行われている予測結果をもとに、21 世紀中に起こり得る可能性の高い気候変化について解説します。

付録

- ・ IPCC 第三次評価報告書 第一作業部会報告書～政策決定者向けの要約（SPM）～
- ・ 平年値表
- ・ 20 世紀の気象災害年表 など

本書は、気象関係者をはじめ、一般の方々にも読みやすいよう、カラー図表を中心とした分かりやすい記述としたほか、コラム欄を設け、専門的な知識についてもやさしく解説しています。また、付録の CD-ROM には、日本の月平均気温・月降水量の平年値や本書の作成に使用した各種データが収録されていますので、気候変化に関するグラフ等、地球温暖化関連の教材や資料を自分で作成することができます。

本書を通して、20 世紀に観測された日本の気候変化、そして、21 世紀に起こり得る可能性の高い気候変化をはじめとする「気候」への理解、興味を深めていただければ幸いです。

(本書からの抜粋)

1.2.6 真冬日と冬日

最高気温が0℃未満の日は真冬日，最低気温が0℃未満の日は冬日と呼ばれています。では，この真冬日と冬日の年間の日数は，20 世紀にどのように変化したのでしょうか。北日本のデータをもとに見てみましょう。ここで，ある年の冬日，真冬日日数とは前年の9月からその年の8月までの合計とします。

図 1.2.6.1 は，北日本における真冬日と冬日日数の経年変化を示しています。この図を見ると，1940 年代半ば以降は，真冬日日数，冬日日数ともに変化傾向は類似しており，特に 1940 年代半ばから 1960 年頃にかけて減少していますが，1980 年代半ばから 1990 年代はじめにかけては急激な減少となっています。1990 年代はじめ以降は，ともに増加しています。

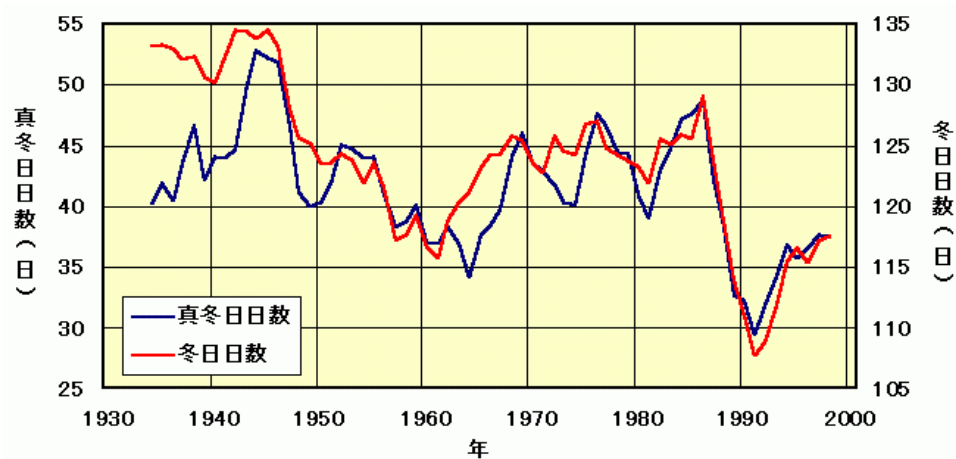


図 1.2.6.1 北日本の真冬日，冬日日数の経年変化

それぞれの値は年々の変動を取り除くため，5 年間の移動平均をしています。
両地域の値とも，表 1.2.2.1 の赤字で示した地点のデータから算出しています。

本書は，政府刊行物センターはじめ全国の有名書店で購入できるほか，郵便局窓口からも「政府刊行物ブックポスト」サービスにより購入の申し込みが可能です。

(税抜き価格：1,900 円)